

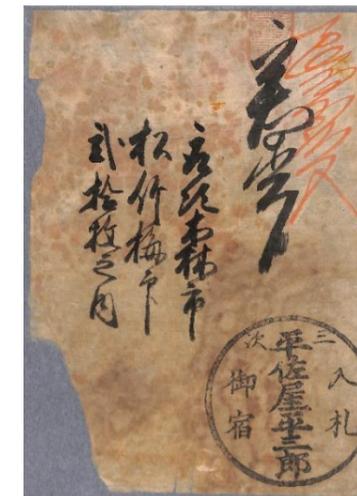
新たに収集した文書から II

開催期間：令和3年1月19日（火）～3月19日（金）

広島県立文書館では、広島県に関する行政文書や古文書、その他の記録を収集し、書庫で保存するとともに、展示や閲覧を通じて広く利用していただいています。毎年収集する行政文書や古文書は多数に及び、令和元年度には614冊の行政文書、2,279点の古文書などを収集しました。

今回の紹介展では、当館で新たに収集した文書の中から、いくつかを取り上げてご紹介します。

この展示を通じて、地域の歴史的な記録資料を収集・保存することの意義をお伝えできればと思います。



五百五拾五
若松分
取次森市
松竹梅印
式拾枚之内



合かん
千五百五拾三
宝金分
取次森市
彦六いそぐことわ口ます
きいそがづともてあとから
おる 林印

襖の下張りから発見された帝釈富くじの合貫
年不詳

松崎（守）家文書（202011-1・2）

富くじ興行は賭博と同一視され、江戸時代には一部を除いて幕府から禁止されていたが、実際には各地で盛んに行われていた。広島藩でも、宮島・尾道・三次・御洗・帝釈などで行われていた。

この2枚は、いずれも奴可郡森村（現庄原市東城町森）で長百姓を勤めていた家の襖の下張りから見つかった帝釈の富くじの合貫（合鑑）で、煙草入札の富札購入時に発行する預り証である。帝釈峡という名前の起源となった帝釈天を本尊とする求明寺の門前町として発達したこの地域では、名産品である煙草の入札を名目として、時期は限られるが富くじ興行が行われた。

富くじ1枚は銀3匁（約2,500円）で購入でき、当り札の最高額は500両（約3千万円）であった。5万枚が販売され当り札は300枚であった。

〈参考文献〉高柴順紀・正本真理子「地域に眠る民俗資料―襖下張りから発見された富くじ―」（『広島民俗』第94号、2020年9月）



中国地方開発昭和39年度重点事業計画図 昭和39年(1964) 広島県行政文書(01-2020-632)

東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通した昭和39年（1964）は、戦後の高度経済成長の真最中であった。昭和35年末に公布された中国地方開発促進法に基づき、昭和39年2月に中国地方開発促進計画が閣議決定され、山陰・山陽両地域の一体的開発・発展と地域格差縮小を基調として、各種開発事業の推進に努めることになった。これは昭和39年度の重点事業の計画図で、耐震改修工事が行われている広島県庁舎の3階西側の床下から昨年発見された。

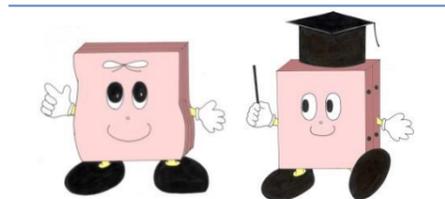
広島県関連の道路関係では中国縦貫自動車道、尾道～今治架橋、広島大橋、1級国道2号線バイパス、1級国道54号線、2級国道広島江津線、鉄道関係では山陽新幹線、本郷線、三江線、開発・工業関係では広島地区新住宅市街地開発、太田川東部工業用水道、福山工業用水道、備後地区工業用地が記されている。

これらの計画はその後実施されていったが、加計駅・三段峡駅間の本郷線を浜田駅まで延長させる計画は、昭和55年の国鉄再建法成立により断念された。



平和記念式典関係資料 平成7年～平成18年(1995～2006) 広島県行政文書(01-2020-727～753)

広島県健康福祉局に所属する被爆者支援課では、被爆者に対して被爆者健康手帳を交付し、毎年定期的な健康診断を行い、被爆者からの各種相談に応じるなど被爆者の援護に関する様々な業務を行っている。これは、毎年8月6日に開催される平和記念式典に関して、被爆者支援課の前身である原爆被爆者対策課などが作成した文書である。



広島県立文書館のマスコット モンちゃん(左)とジョーくん(右)

広島県立文書館展示室

広島市中区千田町3丁目7-47

広島県情報プラザ2F

TEL082-245-8444

FAX082-245-4541

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/monjokan/>



広島引越当所御家中衆 宝暦末年頃(1760頃) 専法寺文書(202010-1)

三次藩5万石は4代藩主長経が享保4年(1719)に10歳で病没して廃藩となり、再興された三次内証分家5万石も当主の長定が翌年5月に7歳で死去したため、断絶となった。その遺領は広島本藩へ還付されたが、300人以上を数える旧三次藩士のほとんどはその後も三次に在住していた。

宝暦8年(1758)4月、広島城下町では広島城の櫓や泉水屋敷(現縮景園)、町屋3,050竈など城下町の東部大半が焼失した宝暦の大火が起こった。広島ではこれを機に城下の諸施設などを入れ替える総割替えを行い、生じた空地为旧三次藩士の屋敷として頒与することにした。これは、三次町の専法寺に伝わる旧三次藩士の陪臣や小者などを含めた約360名の引越し先の住所録で、流川や八丁堀、鉄砲町など城下東部の町名が目立つ。



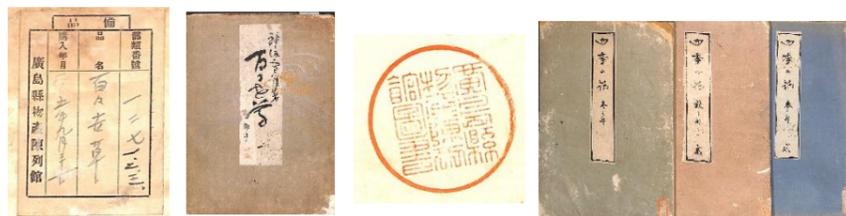
広島蚕業試験場の報告書 大正13年～昭和6年(1924～31) 旧埼玉蚕業試験場所蔵文書(202002-2～16)

広島県の養蚕・製糸業は明治中期頃から重要性が認識されるようになり、明治末期から特に南東部の芦品・御調・深安郡と、県北の比婆・双三両郡で急速に躍進した。それでも昭和5年(1930)頃の広島県の桑園面積は全国30位に過ぎなかったが、県内農家生産物の中で繭は米・麦に次ぐ第3位の位置を占めた。

養蚕業が発展するためには、品種の改良・選定や蚕の飼育法が重要であった。このため、県は大正2年(1913)に芦品郡広谷村(現府中市広谷)に県立原蚕種製造所(大正11年に県蚕業試験場と改称)を創設して養蚕技術改良の中心機関とし、蚕業技術者を養成して原蚕種の製造配付や試験研究などの業務に当たさせた。

展示した資料は大正から昭和初期の広島県蚕業試験場が発行した事蹟報告や試験成績概要である。これらは平成10年(1998)まで存続した埼玉蚕業試験場で保存されていたもので、それを引き継いだ埼玉県立熊谷図書館から寄贈された。

右上の写真は、昭和8年に広島県蚕業試験場内に建設された蚕壺供養塔である。



「広島県物産陳列館」の蔵書印や備品ラベルのある図書 横田登文書(202003-1)

右3冊の『四季の花』の見返しには「広島県物産陳列館」の蔵書印(中)が、左の『百々世草』には大正5年(1916)9月21日付けの同館の備品ラベルが認められる。前年4月に竣工した広島県物産陳列館(現原爆ドーム)では、県内の物産や他府県からの参考品を陳列するだけでなく、物産取引に関する図書や新聞・雑誌などを閲覧することもできた。同館は博物館・美術館・図書館の役割も果たしていたのである。

同館はその後県商品陳列所、県産業奨励館と改称したが、原爆投下前に同館の職員であった横田登がこれらの図書を借り出し、そのままとなったため焼けずに残された。

明治40～41年に出版された『四季の花』(全11冊)は、千種に及ぶ四季の草花図譜で、高名な琳派の画家3名(酒井抱二・鈴木其一・中野其明)が筆を執った。

また『百々世草』(全3冊)は神坂雪佳による琳派の伝統を引き継いだ木版刷りの図案集で、国内外から高い評価を受けた。これらの図書はいずれも手摺木版の和装本の専門出版社、京都の芸艸堂から刊行された。

昭和7年(1932)頃から関東軍が中心となって満州への農業移民事業を展開したが、昭和12年に日中戦争が始まると戦争への動員が優先され、満州移民は確保できなくなった。このため小学校を卒業した16歳から19歳までの身体強健で、父母の承諾を得た男子が自由に応募することになったが、当局から各都道府県へ、さらに各学校へ応募数が割り当てられ、それに応じて各高等学校の担当教師が卒業生に応募するよう働きかけたのが実態であった。こうして7年間で9万人以上の青少年が半強制的に満州へ渡った。広島県からは長野県について多い4,359人が満州に渡り、厳しい条件下で多くの犠牲者を出した。

広島県退職校長会の丸子要一氏は、校長時代に多くの教え子を引率して満州へ渡らせたことを悔やみ、県内の遺族や帰還者に連絡して満蒙開拓青年義勇隊関係の資料を収集し、後世へ伝えようとした。



義勇軍送出について (「拓殖係経営録」)

昭和16年(1941)

広島県退職校長会収集資料 (201916-4)

賀茂郡校長会では、昭和15年(1940)の紀元2600年記念事業で「木を植えるのもよいが、それよりも大陸に人を植えることが日本の発展の必要な事である。郡をあげて義勇軍送出に邁進しようではないか」と決議し、青年義勇隊の賀茂小隊の編成に着手した。

第1回と第2回で23名の義勇軍を送り出した竹原尋常高等小学校では、竹原満蒙義勇会が結成され、現地義勇軍の激励・慰問や拓殖思想の普及などを行った。



広徳文苑

昭和17年(1942)

広島県退職校長会収集資料 (201916-4)

各都道府県から選抜された青少年は300名を標準として中隊に組織され、茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所(内原訓練所)で3か月の学習と武道及び体育と農作業の基礎訓練を受けた後、さらに満州国の現地訓練所で3年の訓練を経て義勇隊開拓団として入植した。

『広徳文苑』は広島県内義勇軍訓練生の文集である。訓練は厳しく、その途中で病死する者もいた。



満蒙開拓青年義勇隊の追悼集や手記集

昭和58年~平成6年(1983~1994)

広島県退職校長会収集資料 (201916-16~19)



佐伯郡地御前村家並みの図 正徳3年(1713)

渡辺家文書 (202007-186)

「国郡志下しらべ書出帖」によれば、佐伯郡地御前村(現廿日市市地御前)は往古「谷ノ浦」と呼ばれていたが、厳島神社(内宮)と海を隔てて外宮社(現地御前神社)が鎮座することから「地ノ御前」と呼ばれるようになった。地御前村は外宮社の門前で、東西に細長い半農半漁の集落として発展した。

これは地御前村のうち浦方の町屋敷を描いた正徳3年(1713)の絵図で、各家の表間口とその所有者名が記されている。街道沿いだけでなく、家の裏手まで借家や納屋・牛屋が配置されていることがわかる。絵図中央部分の観音山には観音堂、その北側に西向寺(浄土真宗)が描かれる。外宮社は記されていないが、右端の海に面して同社の欄守職と思われる飯田半丞の屋敷が描かれている。

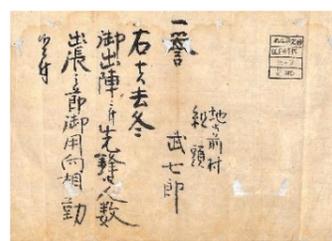
国郡志御用下調べ書出帖(佐伯郡地御前村)

文政2年(1819)

渡辺家文書 (202007-76)

広島藩は領内の地誌である「芸藩通志」を編さんするため、その基礎資料として、村名の由来から村高・年貢・風俗・寺社・人口などの村の概要を記した「国郡志御用下調べ書出帖」を村々から提出させた。これは地御前村の書出帳の控である。

展示は地御前村の地勢と産業について説明した部分である。地御前村の東南は海浜で人家が集中する一方、西北部は山が高く、禿山も多かったため、大雨があると砂が流出して田畠が埋まるなど被害を受けやすかった。村人の4割は農業を営み、稲作を主としながら綿・琉球芋(サツマイモ)・大豆・小豆・麦などの畠作も行ったが、砂地であるため出来は悪かった。その他の村人は漁業や船稼ぎ・商業・漁網などで生計を立てていた。



地御前村先手頭 武七郎
一組頭格
右ハ戦争之砌郡用所江相詰、役人共示談ニ応じ、甲斐々敷立廻り、就中大野村戦争之砌人夫引纏罷越、別而骨折、駈引振も宜く、彼是奇特之義ニ付
十二月廿九日

地御前村組頭 武七郎
一誉 組頭
右者去冬 御出陣ニ付先鋒御人数出張之節御用向相勤候ニ付

長州征伐における奇特の働きに対し誉書

慶応元~2年(1865~66)

渡辺家文書 (202007-41・43)

地御前村組頭であった武七郎は、元治元年(1864)冬の第1次長州征伐で先鋒を命じられた広島藩兵が佐伯郡の藩境まで出兵した際、物資の運搬などで尽力したため藩から誉められた(右)。

第2次長州征伐において広島藩は中立の立場を取り戦争には参加しなかったが、守備兵として部隊を佐伯郡内に派遣したため、部隊の陣地設営や物資運搬などに従事する軍用人夫を領内から徴集した。武七郎は慶応2年7月から8月にかけての大野村戦争の際にこれらの人夫を引き纏め、尽力したため、戦後に組頭役を退いた後も組頭格の格式が与えられた(左)。



一山川の形勢、産業之大概
当村本郷西者山高ク、北下リ二連山海浜江出張シ、未申之方茂又小山海へ続キ、東南者一円海浜辺二人家市中之如ク建次キ、此谷合二本郷田畠有、谷々川筋有之候得共行短ク至而早損所、尤大雨洪水御座候得者野山禿山ニ而砂多流出、田畑埋リ又ハ水吐悪敷所も有之、水損之害茂御座候得共、苗代仕向之時分方夏方ニ至リ候而者兎角潤雨ヲ相好ミ、飛郷阿品・鯖浜と申所是又磯辺谷合ニ而東南向、尤本郷二競へ候得者水掛リ宜ク方ニも御座候得共何レ茂潤雨を相好ミ、山所肥草村相応、土地之居り中ノ下、作物者先ツ稲作を主と仕、其外綿作・琉球いも・大豆・小豆・大根等種々畠作、尚麦作ヲ重と仕候処素リ地面砂地ニ而諸作出来悪敷、乍併人民も多ク魚漁・船持・鰯網等卸シ申候ニ付都而肥し沢山成ル方ニ而作物相応ニ作り立、村中押概し候得者四歩方農業、六歩方魚漁・船持并商ひ・縄ない又ハ船之網ヲ打方々江積出等之浮儲ニ而渡世相凌キ、季候寒暖とも広島同様